

2022年2月9日

申請者：津田栞里（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程、SD191017）

論文題目：バウムガルテンの実体論—スピノザ論争史から読み解く 18 世紀ドイツ哲学史—

論文審査委員

森村敏己

久保哲司

加藤泰史

1 本論文の概要

本論文はスピノザ主義が提起した問題への応答という観点から、ランゲーヴォルフ論争を検討し、そこで明らかとなった論点を通じてバウムガルテンの『形而上学』を分析することで、従来とは異なる、かつ説得的なバウムガルテン解釈を提示するとともに、18 世紀前半から中葉に至るドイツ哲学史の再考を促した力作である。

2 本論文の成果と問題点

本論文の成果として強調すべきは以下の点である。

第一に挙げるべきは、ライプニッツ、ヴォルフの後継者、カントの先駆者として位置づけられてきた従来のバウムガルテン解釈からは距離を置き、このように哲学史の流れの中に当てはめることで見逃されがちなバウムガルテン自身の問題関心を浮かび上がらせるため、彼が生きた 18 世紀前半の哲学的課題との格闘、すなわちスピノザ主義が提起した問題への対応という側面からバウムガルテンの哲学、とくにその実体論を分析した点である。そのために津田氏は彼の原著『形而上学』における版の異同に留意しながら精緻なテキスト解釈を積み重ねることで、バウムガルテンの実体論の哲学的意義を捉えることに成功している。具体的にはスピノザ主義論争を軸とすることで、「実体的なもの」という概念の導入による独自の实体論が、伝統的実体論や、被造物のみにふさわしいヴォルフの実体論だけでなく、神を唯一の実体とするスピノザ主義との差異化を目的としたものであるとする解釈を提示した。また、バウムガルテンのモナド論も、従来の研究が指摘するような、ヴォルフを経た上でのライプニッツへの回帰といった枠組みで説明されるべきものではなく、

バウムガルテン独自の新しい実体論のうえに築かれたものであり、そこにもスピノザ主義との対峙という姿勢が見えることを明らかにしている。さらにバウムガルテンが提唱した「実体化された現象」という概念も、これまではカントの「現象的実体」の先駆として位置付けられ、いわばカント研究の枠内で解釈されてきた。しかし、ここでも津田氏はスピノザ主義と向き合う中での独自の実体論の構築という観点から「実体化された現象」を捉え直している。その際、バウムガルテンは、モノ論における複合実体という概念を援用しながら、実体も実体化された現象もともに「実体的なもの」を通して偶有性を内属させる力を有するという点において共通性を持ち、その意味で、現象においては実体であると主張したとされる。こうしてバウムガルテンは実体論の中心を自存という要素から「実体的なもの」「偶有性を内属させる力」へと移行させ、こうした実体論に基礎づけられたモノ論と「実体化された現象」概念を組み合わせることで、神と被造物の違いを前提としながらも、両者をいずれも実体として捉える新たな視座を確立したとされる。そして、このような実体論の構築過程とその特徴はスピノザ主義への批判という観点を導入することで明確に理解することができるという。こうしたバウムガルテン解釈を提示するに至る津田氏の論証は極めて緻密かつ明晰であり、説得的である。

第二の功績としては、スピノザ主義という媒介項を設定することでバウムガルテンのみならず、18世紀ドイツ哲学史をあらたな観点から整理した点が指摘される。スピノザ主義を単純にスピノザ自身の思想と同一視することは出来ない。スピノザ主義は多くの場合、唯物論的、運命論(決定論)、無神論的あるいは汎神論的傾向をもつ哲学・思想を攻撃するための「レッテル」として用いられた。その意味で、スピノザ受容史はそれ自体が複雑な問題をはらむテーマであり、また、当時の哲学者たちは、いわば「悪役」となったスピノザ主義から自身が影響を受けたことを認めるわけでもない。このようにスピノザ主義を定義づけること自体が困難を伴う中で、津田氏はドイツにおけるスピノザ受容のあり方、あるいは批判対象としてのスピノザ主義の成立とその論点の変化を丁寧に追い、そこからランゲ、ヴォルフさらにはバウムガルテンらが、彼らが理解するスピノザ主義にどのような問題を見出し、それと取り組んだかを説得的に論じている。それにより、18世紀前半のドイツにおけるスピノザ主義の変遷と、スピノザ主義が果たした役割の重要性を論証することに成功した。言うまでもなく、この場合の「重要性」とはスピノザ主義が普及したこと、受け入れられたことを意味するものではなく、スピノザ主義が提起した課題が当時のドイツ哲学にとって深刻なものであり、それにどのように対応したかを検討することが、18世紀前半のドイツ哲学史の理解にとって極めて重要であることを指している。津田氏の研究は、哲学や思想の影響という、実証的に論証することがしばしば難しい問題について、単なる普及や受容という観点からではなく、スピノザ主義と

いう具体的な事例を取り上げて説得的に論じたという点においても高く評価されるべきである。

ただし、今後に期待すべき点がないわけではない。

第一は、スピノザ主義批判という文脈においてなぜ実体概念が重要なテーマとして意識されたのかという問題にかかわる。津田氏はバウムガルテンにより構築された新たな実体概念の意義を説得的に論じる一方で、同時代の哲学者にとって実体概念の再考が重要課題となっていた哲学的背景については十分に議論していない。そこには神学的世界観と急速に台頭しつつあった自然科学との緊張関係の中で、神学を否定することなく、かつ自然科学がもたらす知見に対応する実体論の必要性という時代的要請があったと思われるが、本論文においては自然科学の発展が哲学に突きつけた課題、影響という視点がやや希薄であるという印象を受ける。

第二に、バウムガルテンを含めスピノザ主義と対峙した哲学者たちが「表象力」「*energia*」「広義の力」「狭義の力」など多様な表現を用いながら、等しく「力」という概念を重視していたことの意味については、より詳細な議論を提示すべきだったと思われる。哲学者たちが「力」の概念をどのようなものとして捉えていたかを明らかにすることは、スピノザ主義論争の特質を理解する上で重要であろう。また、それは機械論的唯物論への批判との関わりで、有機体や生命現象を説明する上でも重要な概念であったはずである。

もちろん、こうした問題は本論文の高い水準を損なうものではなく、著者もまたこのような課題は十分に自覚しており、今後の研究によって克服されることを期待したい。

3 最終試験の結果の要旨

2022年1月27日、学位請求論文提出者、津田栞里氏の論文についての最終試験を行なった。本試験において、審査委員が、提出論文「バウムガルテンの実体論—スピノザ論争史から読み解く18世紀ドイツ哲学史—」に関する疑問点について逐一説明を求めたのに対し、氏はいずれも十分な説明を与えた。

よって、審査委員一同は、津田栞里氏が一橋大学学位規則第5条第1項の規定により一橋大学博士（社会学）の学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有するものと認定した。